

第1章 留学体験記

英国留学体験記 ～大学院留学～

木村早霧さん

PROFILE

2002.3 日本
市立横須賀高校卒業

2002.4～2006.3 日本
桜美林大学国際学部

2006.4～2007.7 日本
民間金融機関勤務

2007.10～2008.10 英国
London School of Economics and
Political Science, MSc Urbanisation
and Development (修士号取得)

2009.4～ 日本
内閣府 入府、現在に至る



◎ 留学中の一週間の授業時間割

	月	火	水	木	金
1 (10:00～11:00)	開発学①		都市開発学①		アフリカ開発①②
2 (11:00～12:00)		英語 (自由選択)		都市開発学②	
3 (13:00～14:00)		英語 (自由選択)			
4 (14:00～16:00)	開発学②				
5 (16:00～18:00)					開発学③ (オープン セミナー、自由参加)

私の語学学習法

渡英前はIELTSの勉強をひたすら行い、学期が始まる前に大学院のLanguage Centreが主催している一カ月間の語学コースに通い、授業に必要な英語力を磨きました。授業では読む文献の量が大量にあるので、リーディングのコツやエッセイの提出、プレゼンテーション、ディスカッションなどに耐えるための技術を教えてもらった上、授業が始まる前に友達ができ、ノンネイティブの私としては非常に助かりました。



1. 留学の動機

漠然と高校時代から留学をしたいと思っていましたが、実現させないまま月日が経って行きました。ただ大学在学中に、日本政府主催の世界青年の船事業やODA民間モニター事業でアフリカのタンザニア、セネガルを訪ねたのがきっかけで、アフリカへの開発支援に深い関心を持ち始め、開発支援に関する勉強や活動を進めていくうちに、将来的にその仕事に携わるなら海外で修士号を取った方がいいことを知り、海外留学を視野に入れ始めました。

2. 英国、LSEを選んだ理由

英国を留学先に選んだ理由は、アフリカ支援に関して歴史があったことが一つにあげられます。イギリスの中では開発学に力を入れている大学がいくつかありますが、その中でLSEを選んだ理由は、著名な教授や講演者、優秀な学生が世界中から集まるなど、恵まれた環境が他大学よりもあったことが大きな理由です。在学中はノーベル賞を受賞したムハマド・ユヌス氏やジョセフ・E・スティグリッツ氏等の講演を聞く機会に恵まれ、大学院の授業に加え貴重な経験となりました。またイギリスは一年間で修士号を取得できるため、留学期間中の授業料や滞在費、帰国後の再就職のことを考え、総合的に英国留学を決めました。

3. 学校での授業、学校生活、日常生活

大学院での授業は最初に大教室での講義があり、その後10～15人ほどの小グループに分かれて、さらに講義の内容を深めるために学生によるプレゼンテーションやディスカッションが行われました。授業がいったん始まると、予習や宿題、復習であっという間に一日が過ぎ、一年間の留学はあっという間でした。また日本の大学とは比べ物にならないくらい目を通すべき参考文献があり、リーディングには苦労しました。ただ私が在籍したコースはLSEの中でも20数名の少人数コースだったため、担当教授や同級生とすぐに仲良くなり、学期の終わりや友人の誕生日にはよくホームパーティが開かれ、授業外で仲良くなる機会が多々あり、授業の準備等でも色々とお助けられました。

ロンドンには大きな公園や博物館、美術館が数多くあるので、授業の予習・復習でつらい時にはよくリフレッシュするために訪れていました。また大小のスーパーマーケットが点在するので食品、日用品を購入する分には困らず、日常生活に不自由することはほとんどありませんでした。

4. 留学後の進路・活動

帰国後半年間ほど青少年国際交流団体にボランティアをした後で、内閣府経済社会総合研究所(日本のGDPや国民所得、資産等を推計・公表している部局)に入府。事務的な仕事の中でも諸外国のデータ引用などの情報収集や、海外諸機関とのやり取りをすることもあるので、留学時代に習得したリサーチ技能は多かれ少なかれ現在の仕事に活かされていると思います。また身近に海外留学を考えている人が多いので、願書の提出方法や大学院での様子など、留学への障壁を軽減させるために私自身の経験を草の根ですが伝えたりしています。

5. 英国の魅力と後輩へのアドバイス

なかなか英語では授業で学んだことをすべて吸収することは難しいので、日本語である程度の知識を入れてから授業に臨むことをお勧めします。参考文献となっている本の中には日本語訳されているものもあるので、何冊か持っていくといいです。また日本人留学生の中にはいろんな経験をしている人が多いので、日本人同士の交流も積極的にしていくと、期末のテスト対策だけでなく、帰国後の進路選択、お互いの意識向上において非常に役に立ちます。

第1章 留学体験記



留学後の人生

～米国コミュニカレッジ留学を経て～

成川憲司 さん

PROFILE

1996.3 日本
高等学校卒業

1997.4～2001.3 日本
甲南大学理学部

2001.8～2002.8 米国
Palomar College EMT-Basic class
(EMT-Basic資格取得)

2005.3～2006.4 米国
Palomar College EMT-Paramedic
(Paramedic資格取得)

2006.6～2007.6 米国
AMR (民間救急会社)

2007.11～2009.3 日本
消防研究機関に所属

2009.4～ 日本
帝京大学医療技術学部
スポーツ医療学科 救急救命士コース教員
(救急救命士資格取得)



◎ 留学中の一週間の授業時間割

	月	火	水	木	金
(8:30～16:30)		循環器		循環器	シミュレーション 実習

1. 留学の動機と留学先の選択理由、留学生活

大学受験の頃、いまこの瞬間にでも学びたいことはと自問し、“もし、自分の目の前で苦しんでいる人がいれば、何かをして助けてあげること”がその回答でした。言い換えると、それは、現場で力を発揮できる救急医療でした。そしてそれをどこで学ぼうかと考え、自分なりに日本の救急医療だけでなく他国と比較した結果、予想以上に日本の救急医療が遅れていることがわかりました。それなら、日本にこだわる必要はなく、より進んだ救急医療を海外で学ぼうと決心しました。だから、米国を留学先に選んだ理由は、英語を学びたいからや留学人気だからではなく、ただ“高度な救急医療を学べる”という理由からでした。

2. 留学後の進路選択と決定

留学目的は救急医療を学ぶと同時に、海外で学んだものを活かして日本の救急医療に貢献することでした。留学中には様々な壁がありましたが、なんとかParamedic (日本で例えると救急救命士) 資格を取得しました。しかし、資格は取ればよいというものではないので、実際に現場で経験を積み、学校では学べない“現場学”というものをたくさん学びました。そして働きはじめて一年くらいが経とうとした時、“Paramedicという職業をもっと極めたい”という個人的な思いは強くありましたが、本来の目的はこの米国で学んだ技術を日本の救急医療に活かしていくことだと再認識し帰国を決心しました。

日本帰国前には、日本の救急現場で経験を積むことを視野にいれていました。しかし、日本では消防組織に入らないと救急現場では働けず、また消防組織に就職するには年齢制限がありました。さらに、米国のParamedic資格は日本の救急救命士資格に書換えはできませんでした。だから、今ある自分で何ができるかを知るために約7年も離れていた日本の現状を把握することにしました。自ら動きいろいろな人に出て話を聞いたりして情報収集しました。そういった時に、消防関連の研究施設で非常勤として働ける話を頂きました。非常勤という形でしたが、自分の目的にあった場所であったし、また米国で学んできたものを活かせるという思いで所属させてもらいました。そこでは米国での現場経験が非常に役に立ちましたし、もちろん専門的な英語も十分に役立ちました。そこで働くようになってからさらに様々な人と会う機会が増し、今の大学の教員採用のお話もそういった中から頂きました。ただの幸運かもしれませんが、自分に何ができ何が何を把握して突き進めばいつのまにか自分の望む道に進めた気がします。

3. 留学後の状況や感想、アドバイス

現在、米国で学んだことを活かしながら大学での救急救命士教育や救急医療に携わっています。そういったことができるのも、誰でもどこにいても容易に入手できるインターネット情報よりも実際に留学で得た情報や経験が重要視されているからだと思います。また、英語は話せて当たり前だと思われがちですが、個人的な意見で言うとまだまだ物足りません。しかし、留学中ずっと奮闘したせいか、発音はともかく他者とのコミュニケーション能力は人並みについたと思います。日本語をずっと使い続けていると気付かなかったかもしれませんが、英語を学ぶことによってコミュニケーションの大切さに気付くことができたのは、留学の大きなメリットだと思います。

そして、米国でできた人脈というのは非常に感謝しています。時折、海外調査のためのコーディネートや自分の知らないことを現地の人からメールなどで聞くことができるのは非常にありがたいです。留学ではつらいことばかりでしたけれど、今思い返すとそのがんばった分だけ、今の自分を支え、守ってくれています。留学で遊ぶ人もいますし、すごく勉強する人もいます。どういった留学をするかはその人次第ですが、自分の場合信じてきたことをやってきたから今の自分が成り立っています。留学してどうするの？留学後の就職は？という不安は誰にでもあると思いますが、誰も未来のことなんてわかりません。いまこんなに便利な世の中になったのも、不可能だと言われたことを誰かが信念を持って突き進んだ結果だと思います。だから、自分の本能が感じたものを信じて突き進んでみるのも一つの方法かもしれません。未来は誰にもわかりませんが、ただ一つ言えるのは未来をつくるのは、今までの自分であることは確かです。

